

(4) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点について(表-3, 京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関(定点)名簿)

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関(定点)」は、インフルエンザ定点, 小児科定点, 眼科定点, 性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており, 診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

平成25年12月末の定点数は, インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 性感染症定点13, 基幹定点1である。

行政区別定点数(平成25年12月末現在)

行政区\定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	7	4	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	4	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京	8	5	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
西京	7	4	1	1	—
合計	68	41	10	13	1

イ 年間報告数, 定点当たり報告数の推移(表-4-1~5-2, 図-1~2, 図5)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザ定点からの年間報告数は, 12,538例であった。平成18年以降ではインフルエンザ(H1N1)2009の流行した平成21年, 平成24年に次いで多かった。

インフルエンザについての詳細は, 「(2) イ 平成25年 インフルエンザのまとめ」を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの11感染症の年間総報告数は, 20,603例であり, 平成18年以降では平成21年, 平成19年, 平成20年に次いで少なかった。上位5感染症は, 感染性胃腸炎(10,497例), 手足口病(2,747例), A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(2,014例), 水痘(1,862例), ヘルパンギーナ(1,140例)の順であった。上位5感染症の報告数の合計は, 18,260例で年間総報告数の88.6%を占め, 最も多い感染性胃腸炎は, 50.9%を占めていた。

小児科定点把握対象感染症の定点当たり報告数をみると, 過去5年間(平成20年から平成24年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症は, 11感染症中5感染症であった。過去5年平均値との比では, 咽頭結膜熱が2.15倍と最も高く, 年間報告数は570例で, 過去5年間で最も多かった。

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
インフルエンザ	12,538	186.83	0.94 (0.70)
RSウイルス感染症	792	19.32	2.00 (0.94)
咽頭結膜熱	570	13.93	2.15 (2.24)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2, 014	49.23	1.24 (0.82)
感染性胃腸炎	10, 497	256.34	0.88 (0.73)
水痘	1, 862	45.48	0.97 (0.95)
手足口病	2, 747	67.45	1.75 (6.21)
伝染性紅斑	48	1.17	0.16 (0.29)
突発性発しん	784	19.17	0.98 (1.01)
百日咳	5	0.12	0.16 (0.31)
ヘルパンギーナ	1, 140	28.18	1.39 (1.48)
流行性耳下腺炎	144	3.52	0.19 (0.38)
合計	20, 603	503.93	— (0.92)

(ウ) 眼科定点

眼科定点からの2感染症の年間総報告数は339例であった。

定点当たり報告数は、急性出血性結膜炎は0.10で、前年に比べ減少した。流行性角結膜炎は33.80で、前年に比べ増加した。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
急性出血性結膜炎	1	0.10	0.22 (0.33)
流行性角結膜炎	338	33.80	1.25 (1.26)
合計	339	33.90	1.24 (1.25)

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は485例であり、その内訳は、性器クラミジア感染症292例、性器ヘルペスウイルス感染症87例、尖圭コンジローマ58例、淋菌感染症48例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 0.93、性器ヘルペスウイルス感染症 0.79、尖圭コンジローマ 1.35、淋菌感染症 0.94であり、尖圭コンジローマのみ、前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
性器クラミジア感染症	292	22.46	1.09 (0.93)
性器ヘルペスウイルス感染症	87	6.69	0.70 (0.79)
尖圭コンジローマ	58	4.46	1.36 (1.35)
淋菌感染症	48	3.69	1.13 (0.94)
合計	485	37.31	1.02 (0.93)

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は、9感染症中4感染症で、年間総報告数は19例であった。

ウ 月別の報告状況（表－6－1～表－10、図－3～4）

感染症発生動向調査における平成25年の報告週対応表は、＜表－1＞に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、この表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別報告数は、1月(5,145例)、2月(4,054例)、3月(1,945例)の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別報告数は、12月(2,490例)、7月(2,323例)、5月(1,834例)の順で多く、報告数が少なかったのは、10月(1,116例)、11月(1,445例)であった。

感染症別報告数の月別1位は、1月～6月、10月～12月が感染性胃腸炎、7月～9月が手足口病で、2位以下は＜表－10＞に示すとおりである。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、＜表－6－2＞に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況(表－11－1～14－2、図－6)

インフルエンザ定点における年齢階級別割合は、0～9歳が5,249例で全体の41.9%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く19.5%を占め、以下2歳 13.5%、3歳 10.1%の順であり、4歳以下が総報告数の62.4%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、0～5箇月を除く年齢階級で感染性胃腸炎が1位(0～5箇月はRSウイルス感染症が1位)であり、2位は、6～11箇月では突発性発しん、1～2歳では手足口病、3～4歳では水痘、5歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、30～39歳が23.3%と最も高く、次いで20～29歳が16.5%、40～49歳が13.6%であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が25.8%、25～29歳が18.6%、30～34歳が13.0%、35～39歳が11.8%、15～19歳が9.9%の順であり、15～39歳が79.1%を占めた。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、＜表－15－1～18－2＞に示すとおりである。